



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第14回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

批判的思考とは

このコラムを読むのは、いったいどんな方々でしょう。わたしなら、『信徒の友』が来ると、まずパラパラと写真のついでにところを眺め、次に春名牧師のマンガを読みます。最近の表紙や教会紹介は、かつて自分のいた四国の諸教会が取り上げられていますので、なつかしくてその小さな解説を読むのも楽しみです。さて、それからおもむろに「特集」などの記事を読むこととなります。まあ、

このコラムなどは、読むとしてもいちばん最後でしょうね。

読者の中には、おそらく学校の先生もたくさんおられるのではないかと思います。わたしも春になると、新入生たちを迎えます。まだ高校生や受験生の頭でものを考えている学生たちを、なんとかして大学生にするという、たいへんな時期でもあります。そして、そういう彼らが大学に入って最初に受けるのが、「批判的思考」(critical thinking)の訓練です。

この批判的思考というのは、簡単そうに見えて実はなかなか難しいことです。ある学生が話してくれました。大学一年生になって、お兄さんに「今何を勉強しているんだ?」と聞かれたので、少し得意になって、「批判的思考」を学んでいるんだ、何でも人に言われたことを鵜呑みにしないで、自分で考えるんだ、と説明したところ、ふうん、と聞いていた兄は一言。「そうか、おまえは先生に批判

的思考をしない、と言われて、とっても素直にそれを受け入れているんだね」。

なかでも、批判的思考の正反対であるように見えるのが信仰です。キリスト教徒というのは、よほどのお人よしだ、十分な科学的根拠もなしに、どうしてお仰祈おまごみたいなおことを信じられるのだ、などと言われると、いかにもそのとおりに思えてきてしまいます。都会の大学に来ると、それまでの自分の信仰が何だかとても子どもじみたものに見えてくるのかもしれない。

けれども、わたしはそこでこそ、しっかりと批判的思考を實踐してほしいと思います。だいたい、わたしたちが批判的に考えるのは、人のことです。それは簡単だし、実はちょっと愉たのしいことでもあります。しかし、真の「批判的思考」とは、他人ではなく自分の思考に批判的吟味の目を向けることでしよう。それはあたかも、自分の座っている椅子いすの足

わたしたちは、伝統に、權威に、伝聞に、想定に、たくさんのことを教えられ、その中に生きてこそ、

それを乗り越える力を身につけてゆくことができます。

批判とは、何かを継承しつつ乗り越えることなのです。

そう考えてゆくと、真の批判的思考は、

信仰に反対どころか

そのもつともよき随伴者であることがわかります。

をのこぎりで切るようなものです。あるいは、自分のかけている眼鏡をとって、いや自分の目玉を取り出して、それを見ようとするようなものです。だから難しいのです。

どうしたらそんなことが可能でしょうか。

近代懷疑精神の祖デカルトは、その思いがけない方法をこんなふうに教えてくれています。

誰でも、自分の住む家を建て直そうと思う人は、それを壊してしまいう前に、まず十分な準備をしなければなりません。それも、単に建築材料や設計図などを用意するだけではない。いちばん大切なのは、建築にかかっている間も不自由なく住めるように、当座の家を別に用意することだ、ということです。

その「当座の家」とは、何のことでしょうか。それは、「私の国の法律と習慣とに服従

し、神の恩寵おんちゆうにより幼時から教えこまれた宗教をしつかりともちつづける」ことなのです（『方法序説』野田又夫訳、中央公論新社）。やがて自分の家がらつばに建てられた

暁には、この家は不要になるかもしれない。しかしそれまでは、周囲を見回してもつとも分別あると思われる人々の意見に従うのがよい、というのがデカルトの考えでした。

伝統や慣習をかなぐり捨てれば、おのずと新しい家が建つ、というわけではありません。批判的思考は、むしろそれがいかに難しいかを教えてくれます。デカルトは結局、宗教や道徳の問題について、この「新しい家」を作ることができませんでした。

わたしたちの知は、多くを他人に負っています。啓蒙主義の哲学者たちは、「一切の先

入見の克服」を掲げましたが、実はそのような企てこそが、啓蒙主義の先入見の一つでありました。

わたしたちは、自分一人の理性の力だけで何でも理解し判断できるわけはありません。わたしたちの思考のもつとも基本的な枠組みや道具となっているものは、いまここで使っているこの日本語という言語をはじめとして、すべて人々の歴史の中で作り上げられてきたものだからです。わたしたちは、伝統に、權威に、伝聞に、想定に、たくさんのことを教えられ、その中に生きてこそ、それを乗り越える力を身につけてゆくことができます。批判とは、何かを継承しつつ乗り越えることなのです。

そう考えてゆくと、真の批判的思考は、信仰に反対どころか、そのもつともよき随伴者であることがわかります。わたしたちはみな、学生であるなしを問わず、日々成長を続けなければなりません。信仰も同じです。キリスト教といえは、幼稚園時代に聞いたお話のことだ、というのでは、大人の信仰に間に合わないのは当然でしょう。子どもには子どもの信仰があるように、青年には青年の、大人には大人の信仰があります。

さて、みなさんの信仰はどうでしょうか。そろそろパージョンアップのお知らせが来ませんか。